

津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
059-229-7331
共立印刷株式会社

恩師短信	2
二つの校歌	3
ラグビー部OB会誕生	3
思いでそしてこれから	4
なつかしきことばかり	4
自主・自律の津高時代	5
海外在住と情報化社会	5
津高と私	6
津高への思い	6
異動	9
インターネット開設	10

久遠の香と抱き

同窓会長

岡村 初博（昭和15年卒）



あけましておめでとございませう

ご挨拶

学校長 別府 銀孝



タイトル・書
窓
— 津中寮歌より —

千草 光洞（昭和23年卒）
橋本三重子（昭和29年卒）

会員の皆様には、お変わりなく
ご健勝にて、ご活躍のことと拝察
いたします。平素は本校のために、
何かとご支援・ご厚情を賜り厚く

お礼申し上げます。
私は昨年四月、前任井坂校長の
後をうけ、着任いたしました。県
下一の歴史と伝統に輝く本校で、
勤務する機会を得ましたこと、大
変光栄に存じますとともに、責任
の重大さを痛感しております。微
力ではございますが、会員皆様方
のご期待に添えるよう精一杯努力
を傾けたいと考えております。
さて、昨年度より県下で初めて
導入しました二期制、順調に成果

を取め、二年目になりました。学
校群廃止後の入学生徒の状況も年々
良い成果が出ております。一方、
学校は今、建物の大掛かりな内部
改修工事が行われております。昭
和三十八年度に竣工しました教室
棟一号館は既に工事が完了し、次
いで管理棟の工事に入ります。ま
た、昭和九年古河校舎より現在地
に移転した時に造られたプールも
傷みが目立つようになり、まもなく
解体工事が始まる予定です。
本校は会員の皆様にとって青春
の日の思い出に満ちたところであ
り、「永遠のまほろば」であります。
母校への一層のご支援をお
願いいたしますとともに、会員の
皆様のご活躍を祈念いたしまして
ご挨拶いたします。

私が入学したのは、昭和二十九
年であるが、時代的には、日常的
な食料飢餓から脱出しつつあった
ものの、三年前の朝鮮戦争の勃発
といった大事件もあり、敗戦後の
「青い山脈」的な明るさから「逆
コース」と言われる転換期にさしか
かっている時期であった。
体育館はまだなかった。入学式
は新町小学校の古い講堂で行われ
たのを憶えている。
昭和三十七年の火災で消失する
前の木造校舎で、本館だけが2階
建てであった。2号館、3号館の間
の中庭はいつも草ぼうぼうであっ
たが、昼休みには誰かがアコーディ
オンを持ってきて「カチューシャ」

や「灯」を輪になって歌ったりし
た。歌が運動が華やかであったが、
フォークダンスもまた盛んであっ
た。「オクラホマミキサー」「五木
の子守歌」などの曲にのり密かに
思い惚れる「ひとと手を取り合っ
たときの高鳴る胸のときめきは今
でも思い返すことができる。
あの頃あの津高の明るさは、
どこから来たのか。自由であるこ
とを価値基準の全てとし、教師も
生徒も個性の固まりで、一見野放
図な無秩序集団の様でありながら
一人ひとりの持っている理想を追
求する精神の強靱さ、既成の権威
に媚びない批判精神の旺盛さ、こ
れら津高スピリットの根源をなす
ものは、良い意味での伝統がもた
らす余裕とでもいったものから来
ていると言えらるのかも知れない。
原点としての津高は、常に自分
の人生と共に存在し続けてきた。
しかし、今の高校生たちは、そ
して津高生たちはどうなのであろ
うか。私たちは四〇年後の今でも
同窓会を開けば「眼を放つ折引は」
と腕を組んで校歌を高唱する。青
春を共有したという連帯感に理屈
は不要なのである。
恐らく、時代を共有するといっ
た意識の希薄な現代の高校生たち
は、校歌を憶えることすら億劫が
るのが現状かも知れない。
だが、一個の人間にとって、物
語の世界にタイムスリップするの
でもない限り、生きている現在を
拒否することはできない。
今の時代状況に生きる若者たち
に、三〇年後、四〇年後、やはり
自分の人生の原点を津高時代にあ
ったと言ってもらえるような教育環
境づくりに全力投球していきたい
というのが「あの頃」から遠く歩
み来った「この頃」の心境である。
(三重県教育長)

あの頃

田川 敏夫（昭和32年卒）



学校教育がどれだけ人間の一生
を左右する強いインパクトをもつ
ものであるか、これは全く人それ
ぞれであらう。
年代、時代背景、学んだ学校の
状況にもよるし、人との出会いの
良き運、不運もある。
しかし、少なくとも私にとって
津高に学び得たことはその後の私
の人生の生き方を決定づけたと言
える。
いわば原点としての津高なので
ある。
何故そうなのか。卒業後四〇年
の我が人生の道あとを振り返る
時、確たる理由があるわけではな
いが、心の奥の、また奥底で津高
での三年間に培われた何ものかが
チラチラと顔を出し、自分の行動
や判断の原点になっていることに
気づくのである。

私が入学したのは、昭和二十九
年であるが、時代的には、日常的
な食料飢餓から脱出しつつあった
ものの、三年前の朝鮮戦争の勃発
といった大事件もあり、敗戦後の
「青い山脈」的な明るさから「逆
コース」と言われる転換期にさしか
かっている時期であった。
体育館はまだなかった。入学式
は新町小学校の古い講堂で行われ
たのを憶えている。
昭和三十七年の火災で消失する
前の木造校舎で、本館だけが2階
建てであった。2号館、3号館の間
の中庭はいつも草ぼうぼうであっ
たが、昼休みには誰かがアコーディ
オンを持ってきて「カチューシャ」

恩師短信

当世との決別

東 繁 一

八年も前のことになる。六月末の暑い昼時、大豆の苗を植えていると、突然に左の手・足が動かなくなった。これは夢だと思いつつ、左足を引くつもりで、一輪車につかまって立ち上がった。ところが、手・足が動かないのはどうしたのか、暫く休めば治るだろうと伏せていた。ところが段々と悪くなるばかりで、夕方には体全体が動かなくなってしまう。私は不勉強だから、何病かさっぱり見当がつかない。一夜は我慢して翌朝救急車で病院へ急いだ。右大脳に血栓ができて、脳梗塞を起していた。二種のピンが吊されて、脳を洗った。発病の屋敷へ病院へ行けばよかったと思つた後の祭。杖をつ

虜囚床屋

後 藤 伴五郎

津中学では、軍事教練の教官として勤務しているうちに召集令状を受け、昭和十九年フィリピンに出征した。

それから五十年経ったある日、本棚から色のあせた私の理容師の合格証書が出てきた。思えばこれは次のようなことから修得したものである。

戦争が終り、軍事法廷で戦争犯罪者と認定され、軍労働の刑期で集鶴拘留所で服役することになった。

近況報告

在 田 眞 亮

私は、五十二年間の教員生活を終えて二年前に退職して、現在寺院のお守りをしております。

社会を見るのができ、今迄見えなかった事象が広く見えてきました。例えば、野辺の草木の移り変

県下の俊秀

野 間 定 之

この二十五年、万歩計を相手によく歩く。退職してからのこと。県内の東海道、参宮街道、伊勢街道等は殆ど全部、鈴鹿峠の坂の下宿を始めとし、一志の山荘、故陣続きの軽便の終点のその奥が、雲出川の上流へ、行って見し初めて分った。小林校長の「本校は県下の俊

短 信

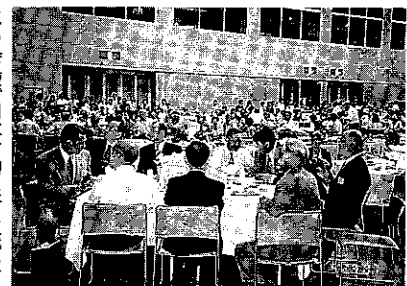
三ツ村 健 吉

併し八ヶ月でその幸せは消し飛んだ。新三年生は生徒役員で四日市の三菱へ（後分れて名古屋へも）行く事になった。私としては家庭での病後の安寧は不可能になった。併し生徒役員はもっと深刻。肉親や家庭からさかれての淋しさ、学業中断と母校を離れての心の屈折、紅余曲折はあったが、何とか終戦の日となった。その間彼らは苦さど恋しさに盛んに歌った。校歌、

平成8年度報告

桑 名 泰 文（昭和50年卒）

一年半前の八月五日、次年度幹事として、総会に出席していた私たちは、センターパレスホテルのパーティー会場横の別室に集まって、翌年の総会はメッセウイングみえて開催することを決定しました。



近況短信

米 本 宏

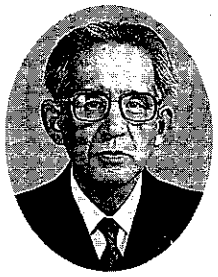
長い津中・津高での教師生活だったので、その時の皆さんにお世話になることの多い昨今です。健康の管理も、温泉やそば試食に引っ張り出してくれるのも、八十の手習いの俳句指導も、当時の少年諸君です。それに旧演劇部員の脚本読み合わせ会、年一回の旅行（一昨年は阿波踊り、昨年は伊



「なんでもこんなことをせんなんのやろ」そう思いながら、昔、共に学んだ友と働いていました。翌日の本番は、みなさまご承知の通り、参加者すべての方に着席いただいたのパーティーを滞りなく実施させていただきました。みなさんにはもちろんお楽しみいただいたかと思いますが、今振り返ってみると一番楽しんで充実した同窓会を行ったのが私たちが正副幹事年だったように思われてなりません。多数のご参加、ご協力ありがとうございました。

二つの校歌

家垣 岩雄 (昭和15年卒)



日本の学校の制度は、目まぐるしく変わってきましたが、変わらないうちが一つあります。校歌です。そこで津高の長い歴史の中で歌いつづけて来た二つの校歌について雑感を綴ることにします。

みんなが元気に歌うので思わず声を張り上げるといった有様でした。ただ最後の響いて起てや時は今ぞと歌うときは幼いながらも勇気づけられる思いで無我夢中で歌ったものでした。

とこの校歌は何時頃制定されたものか知る由もないのです。津高百周年記念誌にその原稿が写真入りで掲載されているのを見

ると三重県津市第一中学校であり、作曲家の弘田龍太郎氏は明治三十八年一中に入学し明治四十三年に卒業、東京音楽学校入学というところからそれ以降第一中学校と

いった大正八年までの間に作られたものと思われまふ。明治末期から大正の初期というのは日露戦争で大勝し日本が世界の檣舞台に躍り出ようという意気込みでいた時ですからその時代のものとして考えます。この校歌も意気込みのものがあ

るようになっています。一番では神国日本の光栄ある伊勢を誇り上げその自覚をなげし、二番では経ヶ峰と平忠盛の遺跡を視野におき故郷の威容を称え、三番では物語多き阿漕ヶ浦を掲げて広大な海を見据えた雄心を掲揚しています。これらは当時としてはなかなかの内容をもったもので三重一中から津中に学んだ若者の心を奮い起たせるに十分なものでした。

その後世界大戦の試練を経て戦後のめまぐるしい学制の変革があり県立津高女と合併の後、津高校となり昭和二十七年十二月に新校歌が発表されました。この山口馨氏の眼によつて捉えられた新校歌はこれまでの津中校歌と比べると、よりやさしく、より具体的に、より象徴的に、神国日本の姿は影を潜め、鎮静な内に向かつて働きかけてくる中身のものとなり

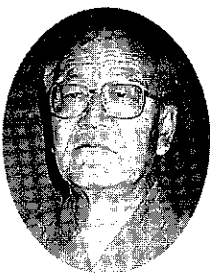
ました。私は津高の教師として昭和三十一年から十六年間のこの新校歌を生徒と共に歌い続けながらいつも思ったことは、三重一中から津中時代歌ってきた校歌とはその空気において随分変わったものだなあ、ということでした。昔私達が祖先の遺跡を永遠に守れと家

いわれなかった。ましてご自分のことなど一切いれなかったことは有名だった。一週間に一回出す「修養録」というのがあって、俳句を何回か書いて出したが、一冊もききに炎天を行く暑さかなに二重丸をたたいたのが、あだにもおまじないの句一回だけだったのが忘れられない。日中戦争が七月にはじまり夏休みに入つた。先生が出征されたことを全然知らず今であつたら友達らから電話などで知らせてくれるだろうが、二学期が始まりはじめて知つたのである。

早速戦地へはがきを書いたら、先生から次のようなお返事をいただいた。手紙をありがと。君からの手紙は今日やっと入手しました。これが戦地でつづける

素逝先生逝かれて五十年 教え子七十二才

長崎 丈 (昭和17年卒)



先生のニックネームは「スパルタ」。

授業中自分から挙手して当るとまちがっていてもするることが出来るが、先生の指名で当り、答がまちがっている一時間立ちっぱなしであった。

「け・け・ける・ける・けれ・けよ」と先生が活用をおっしゃられたときの笑顔のお顔が今も昨日のよつである。

素逝君や笑顔のお顔眼底に 授業中には俳句の「は」の字も

のあたりの夕陽に佇む時し心おどるとか奮ひて起てや時は今ぞと大いに心を奮ひさせて勇み歌った姿は影をひそめ自然と心が内に向き内省の心をかきたてられるものでした。これは時代の流れとして教育の基本が民主、自由、人間個性の尊重へと変わった当然の帰結でしょう。しかし幾度もこの新校歌を歌い続けているうちにふと考えさせられたことがあります。それは詩句の目指す方向は旧と新とでは外向と内向の差こそあれその曲の持つメロディーは津中校歌も津高校歌もよく似ているといつて

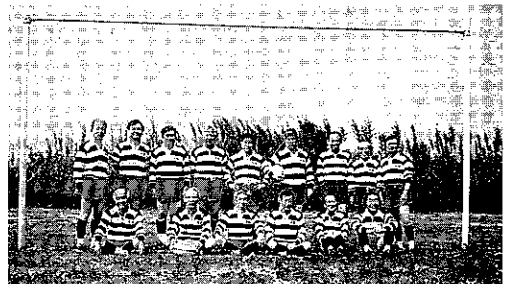
です。私は音楽のことは全く不案内でトーンカンナ者ですが津高の校歌を何度か歌っているうちにそのリズムの流れは津中の校歌に似ているように思えるのでした。厳密には違ふのでしようが素人の私にはそのように思えるのです。

「眼を放つ布引は」と歌い出す時ふと心の中は「煙りはとぎす経ヶ峰」のリズムを思い出させるのです。このように考えますと校歌は詩句もリズムもまた大きなリズムから来る感性も又大きいと言え

るようです。校歌は感性の養成に役立つと思つた頃です。

ラグビー部OB会「有造」誕生

松浦 健 (昭和23年卒)



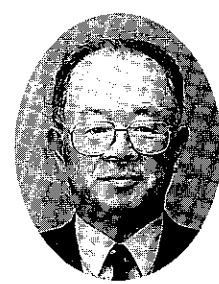
八月三日の同窓パーティーに、ユニフォーム姿で壇上からアピールする機会を得ました。此度津中、津高のOB会を組織(七月三日津の都ホテル・二十八名出席・会則作成・役員選出)母校に因んで「有造」と命名、広く全国的に活躍の、かつて母校でラグビー部員であったOB諸兄に呼びかけています。契機は近藤康雄津市長(昭和26卒)誕生に際し、地元にいるOBが集まったのに端を発します。母校の名簿をたより、かつての仲間をリストアップし、五月十九日、松工OB「赤壁

クラブ」と対戦(種田川河川敷グラウンド・22-0で敗戦・15分ハーフNHKや三重テレビで放映、中日新聞等に紹介されました。今後は春秋年二回ほど定期戦を計画中です。

5と前回の雪辱を果しました。今後は、年度総会など計画し、全国各県で、活躍のOBのみならず、一堂に会し、往時を偲び、旧交を温めていただき、グラウンドにも立つていただけるように取り組みます。どうぞ、諸連絡は前田季男氏(昭和28卒・電話059-12451-2714)へよろしく。この年令になって、又ラグビーができる、しかもこんなにくさくさん仲間が集まる、夢のよつです。たいへん嬉しいです。大切に長続きさせていきたいです。津中・津高ラグビーOBは健在です。「その意気まことに天をく」です。現在名簿のうち、次の年次卒の部員が不明です。該当の方はぜひご一報下さい。(昭和17・19・32・42・44・49・平成元・5)

バレーボールとの巡り合い

岡田 一 (昭和24年卒)



昭和二十一年、戦後の混乱がまだ続いていたが、復興の雄姿とど

もにいち早くスポーツが復活した。旧制津中では戦災により津市刑部の校舎が焼失し、久居の旧陸軍兵舎跡に移転していた。

石ころだらけの旧庭を整備して野球場としたが、そこは同時にラグビー場でもあり、野球のボールとラグビーの楕円球の両方が同時に飛び交う状況であった。校舎(旧兵舎を改造)と校舎の間は、バレーボール、バスケットボール、テニス等のコートとして利用されていた。

私達バレー部員は、砂利の混ったコートの土を掃き、ローラーをかけ、水撒きをして自分の手でコート整備をした上で練習を始めるのが常となっていた。とくにわたしたちも二、三年生は、級生のAチームの練習のお手伝いの後、間を縫ってBチームとしての練習を楽しんでいた。

ところで、手許の津高高等学校卒業生名簿の中の昭和六年津中卒業生の中に「野呂正文」さんの名前がある。津中を出てから日本体操



学校(現日本体育大学の前身)へ進学されたが卒業後太平洋戦争で戦死されたと聞いている。同氏は、津中在学中からバレーボール(当時排球と呼んでいた)の名選手で鳴らし、日体へ進学後はとくに当時アジア地域で開催されていた極東オリンピックの日本代表選手として活躍された方であろうである。

私の下宿していた野呂家は、その正文さんの実家でお父上は既に亡く、お母上が野呂家のご当主としてご健在で私達下宿生のお世話をして下さっていた。そのお母様にとつて若くして戦死されたご長男への追憶の念がいかに深く、オリンピック選手としての子息への誇りがいかに強かったか、下宿人たる私にもひしひしと感じられた。お母様にとっては単なる下宿人への想い出話と云ふよりも、津中の後輩に対する親しみであったのかもしれない。

極東オリンピックを報ずる新聞雑誌のスクラップ類、メダル、レプリカ、ペナント、スナップ写真などがぎらんと大切に保管されており、中でも一個の中古のバレーボールが重要な位置を占めていたように思う。

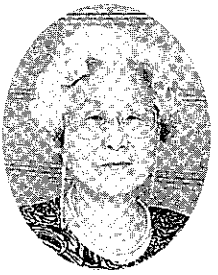
スポーツ復興の波に乗って、戦中には休止していた球技部が復活した時、私は津中三年生となっていたが、津中の二年間球技について全く経験がないにもかかわらず、真一文字にバレー部に飛び込んだ。バレーの何たるかを全然知らないままに、やるからにはバレー以外にはないかのような思い込みは、多分運が大先輩への憧れといったものがそそがせたものだろう。

真夏の炎天下、上半身裸で、素足で駆け付けたコートに水を撒きながらの練習に耐えられたのも原点としての野呂家でのバレーとの出会いがあったからこそと思う。

その後暫く経ってからのバレー部の会合で、OBの方の口から聞いた野呂先輩が日体在学中の夏休み、母校の後輩の指導を終った夕暮れ、独り黙々と運動場の柵木に向つてボールを投げ付け、不規則にはね返ってくるのを、右に、左にと飛び込んで拾う練習を繰り返しておられたことがあつて、と云う話の断片が妙に頭にこびり付いて今だに離れない。(中部電力・副社長)

思いで
そして
これから

伊野和子（昭和11年卒）



大正八年第一次大戦が終り世界が平和になった年に生まれたので和子と命名されました。

女学校二年生の時五・一五事件、五年生の時二・二六事件があつて非常時非常時と呼ばれた世の中は次第に暗くなって来ましたが、一応平穏な学校生活を送ることができました。

柳山の校舎の東は一面畑で阿漕浦の松林が見渡せました。学校から下駄履きで畑の中の道を「南瓜

畑を南瓜が通る」なんて巫山戯たことを口々に足取り軽々海へ通ったことも。青い美しい海で泳ぎ白砂の上で太陽の光を燦々と浴びてまっ黒になつて家へ帰ると、母が「表が裏かわからないが眼鏡が光っているの顔だとわかる。」と笑うほどでした。

さんいまして、平泳ぎの私を鍛えようとなさつたのでした。高農のプールへ練習に行ったこともありました。（その記念写真は今も手許にあります。）しかし三年生の秋になつて健康を損ねた医者様から無理な運動はしないようにといわれて運動を止めました。

四年生で英語科に、五年生ではこの時設置された検定科に入り、卒業時に学校教員検定試験に合格小学校に勤務しました。

男児ばかりの知敬小学校で担任させて頂いた中には津中に進まれた方がたくさんいらっしゃいます。毎年八名・十名位入学され卒業後は社会へ出て大いに活躍されています。教員の活躍は教師冥利に

つづる喜びであります。この小学校に八年勤務して家庭に入りました。

これから先は思い出すのも嫌な暗黒の時代です。（夫は二度目の招集で出征して音信不通、帰還してからシベリアに抑留されていたことがわかった。）家財は戦火によつて焼失、焦土の上の衣食住不足の生活。こんな苦しみは思い出しただけありませんでしたが、孫に中学二年の時、「どんなだった。」と尋ねられて「黙ってはいけいけい、戦争は絶対してはいけない」と話して聞かせましたがごまでもわかつてくれたでしょうか。

二人の子供の成長後再び教職に就き津市内の公立幼稚園に勤務。最初は幼い子の背丈まで腰を屈める仕事に疲れましたが、天真爛漫純粋無垢の幼児に囲まれ、幸せと生き甲斐を感じ幼児教育の研修に土曜日も曜日もない日々を過ごしました。三重県幼稚園協会会長の時に、永井文部大臣を迎えて全国公立幼稚園園長大会を開催、幼稚園教育の大先輩である三重校会長の佐々木かよ先生始め創設期からの功労者の方々をお迎えして幼稚園教育百年を祝う記念大会を開き、又県の第一回海外教育派遣団のメンバーに加わりヨーロッパに

病に寄せて想うこと

上田 延（秋園） 昭21年卒



当時は、田舎にいた母を引取って介護をしていましたので、家事一切を夫に申し送り、身辺整理をして、一刻も早く入院することになりました。

入院後の十日間は、腎臓動脈造影検査など全身にわたる大規模な検査が行われ、その間は妄想が脳裏をかすめ、長い長い時間のようにつづりました。いよいよ手術の当日になりましたが、割合落着いていて、ストレッチャーから手術台に移される時、執刀医を始め並み居るスタッフに「よろしくお願ひします。」と申したのは覚えていますが、吸入マスクをつけられたあどは意識が薄れ、すべての時間が止まってしまいました。

それからどれだけの時間が過ぎたのでしょうか。朦朧とした目に、心配そうに覗き込んでいる長男夫婦の顔が写りました。「無事に済んで良かったね。手術は順調だったとお医者さんが云っていたよ。」と云つて私の手を握つてくれた息子の手の暖かさに安心したのか、再び深い眠りに落ちて行きました。それから数日後、世にも不思議な夢を見たのです。

私は、深い深い谷の屋の上あたりの空に、ふんわりと浮かんでおりました。谷は一面オーブリーン色に沈んでいて、あちこちに小さな網代簾のような物があつて、そこには、可愛い朱色に輝く花が咲き乱れていて、その間を人間的な影が動いているのでした。谷の底の方は遠く暗くよく判りません。余りの美しさに私は谷へ下りて行きたくて仕方なかったのですが、谷のうえの上空を遊泳しているだけで、遂に行くことができませんでした。これは私の魂が肉体を離れて上空にあつて、美しく輝いている安らかな霊界を眺めていたに違ひありません。明け方窓から差し込む朝日に無意識の裡に合掌をしていました。

これこそ病を通して神が与えて下さった、有難くも貴い贈り物と考えております。そして、死の恐怖というものが消えてしまいましたが、又、帰宅してから、つれづれのまに、近くの大樹を探してその樹皮に手を並べていると、自然の大地が私の体に流れ伝わってくることも気がつくようになりました。

只今のところ癌の再発の様子もなく、フラワーデザイナーとして多くの花に包まれ、多くの人と出会い語り合うことができることを感謝しながら、生きております。私に命を再び授けて下さった多くの方々と、目に見えない偉大な力により、今生きていることに感謝すると共に、みずからを耕すことの喜びと大切さを感じています。

なつかしきことばかり

平松 喜代子（昭和17年卒）



平成八年五月十三日、津市のブラザ洞津で、昭和十七年卒・梅組のクラス会が催されました。今回は地元での開催である事と卒業後五十四年、年令も古稀を越え一種の感慨を覚えまして出席させて頂きました。皆様も思いは同じのご様子で、卒業後はじめてお会いした方も大勢あり、総勢四十九名の盛会となりました。賑やかに会も終了。その後クラスメイトの村井様の御厚意で長谷山のふもとにある、平氏発祥伝説の地と云われる忠盛塚、津城跡、美術館等思い出の地をご案内頂いたあと、女学生時代黒の半袖の水着にさらしのベルトという独特のスタイルで水泳訓練に励んだ阿漕浦にも車をすすめて下さいました。かつて美しかった防風林も公園風に整備され、謡曲「阿漕」で名高い、孝子平治の像がたつておりました。海はヨットの繋留場となつており、長い年月の経過を思わずにはおられない風景でした。その後なつかしい母校を一目なりとも見ましょつと云うことで見覚えのある正門に到着、中を覗くと「三重県立津高等学校」

校跡の碑が建てられており一しお深い感慨に打たれました。記念のカメラ撮影をさせて頂いていると職員の方が出てこれ、校長室へ案内して下さいました。私達四人は思いもよらぬゆきに面くらいつつあまりのなつかしさに「好意に甘えてお邪魔させて頂いたのです。校長・教頭先生事務局長様も話の輪に入つて下さり、私も学んだ校舎の写真等その頃の資料をいろいろお見せ下さいました。校長室の窓から見える、かつてバスケットボールのコートがあつたあたりに響いていた楠樹の大木、屏越にみえる教会、等々実に卒業以来の再会で、一瞬五十年前の女学生にタイムスリップした思いでございました。この校舎は現在「三重県立実業高等学校」として使用されていますが、近く改築され、その際には津高女時代の屋根についていたドームが再現される

とお話でした。

ほり高い、三重校の同窓会員も年々とも消えゆく運命にあるわけで、そのうち「幻の三重校」になつてゆくのかと一抹の寂しさを覚えますが、津中、津高女共に津高に統合されて、若き世代の学徒に継承されることを思いますと三重校も一つの礎石としての役目を果たさせて頂く事を喜ぶべきであります。

心はずむ楽しい総会

三重校会長 佐々木 かよ（大正15年卒）



花も若芽も美しい四月十四日に八年度総会を津都ホテル伊勢の間で開催しました。県内各地又東京名古屋支部からも参加、会員百四名、来賓として津高校長別府先生、恩師松岡先生、岡村同窓会長、富島副会長、事務局より松井、鈴木先生が臨席頂き盛大な会合となりました。

先ず校歌斉唱、物故者への黙祷でなつかしい母校時代を偲びながら会は進行。会長から「昨年母校跡に創設された原乳幼児教育センターが、青少年の健全な成長は幼児期からと叫ばれる社会的要請にしっかりと対応していること、戦後五十年を経て「改革と創造」が論じられる今、「張りださず品だ」のかつての教訓を日々に生かし男女共生の家庭・社会づくりに努めましよう」との挨拶に続き来賓の皆様から心暖まるお祝辞や津高並びに同窓会の現況について話を頂きました。そのあと昼食懇談、明るいシャンデリアのもと若返った笑顔に話題ははすみ時のたつたも忘れる雰囲気でした。

「少年老い易く、学成り難し。」とは、中国の詩人朱熹の詩の一節ですが、その詩が私を捉え、切迫して参ります。それは、四年前「ガン」の告知を受けて、死ぬかもしれないと覚悟した時からのことでした。

寒い二月のことでした。肩凝りと倦怠感がだんだんひどくなったので、病院へ行き、エコー検査のあとCTスキャナー検査を受けました。一週間後に病院で、シャーマンに並べられた腹部写真を見て、左右の腎臓の大きさが余りにも違うのに驚いて、「その腫れているのは「ガン」ですか。」と尋ねました。先生は、「腫瘍は六センチ程になっているので細胞生検は出来ない。」と言われ、私にも判り易く、やさしい口調で「ガン」であることを受けられました。癌は、速い他人事のように思っていたことが、我が身の現実の病となったのですから、一時は見も心も凍りつく想いでした。

二人の子供の成長後再び教職に就き津市内の公立幼稚園に勤務。最初は幼い子の背丈まで腰を屈める仕事に疲れましたが、天真爛漫純粋無垢の幼児に囲まれ、幸せと生き甲斐を感じ幼児教育の研修に土曜日も曜日もない日々を過ごしました。三重県幼稚園協会会長の時に、永井文部大臣を迎えて全国公立幼稚園園長大会を開催、幼稚園教育の大先輩である三重校会長の佐々木かよ先生始め創設期からの功労者の方々をお迎えして幼稚園教育百年を祝う記念大会を開き、又県の第一回海外教育派遣団のメンバーに加わりヨーロッパに

二人の子供の成長後再び教職に就き津市内の公立幼稚園に勤務。最初は幼い子の背丈まで腰を屈める仕事に疲れましたが、天真爛漫純粋無垢の幼児に囲まれ、幸せと生き甲斐を感じ幼児教育の研修に土曜日も曜日もない日々を過ごしました。三重県幼稚園協会会長の時に、永井文部大臣を迎えて全国公立幼稚園園長大会を開催、幼稚園教育の大先輩である三重校会長の佐々木かよ先生始め創設期からの功労者の方々をお迎えして幼稚園教育百年を祝う記念大会を開き、又県の第一回海外教育派遣団のメンバーに加わりヨーロッパに

二人の子供の成長後再び教職に就き津市内の公立幼稚園に勤務。最初は幼い子の背丈まで腰を屈める仕事に疲れましたが、天真爛漫純粋無垢の幼児に囲まれ、幸せと生き甲斐を感じ幼児教育の研修に土曜日も曜日もない日々を過ごしました。三重県幼稚園協会会長の時に、永井文部大臣を迎えて全国公立幼稚園園長大会を開催、幼稚園教育の大先輩である三重校会長の佐々木かよ先生始め創設期からの功労者の方々をお迎えして幼稚園教育百年を祝う記念大会を開き、又県の第一回海外教育派遣団のメンバーに加わりヨーロッパに

二人の子供の成長後再び教職に就き津市内の公立幼稚園に勤務。最初は幼い子の背丈まで腰を屈める仕事に疲れましたが、天真爛漫純粋無垢の幼児に囲まれ、幸せと生き甲斐を感じ幼児教育の研修に土曜日も曜日もない日々を過ごしました。三重県幼稚園協会会長の時に、永井文部大臣を迎えて全国公立幼稚園園長大会を開催、幼稚園教育の大先輩である三重校会長の佐々木かよ先生始め創設期からの功労者の方々をお迎えして幼稚園教育百年を祝う記念大会を開き、又県の第一回海外教育派遣団のメンバーに加わりヨーロッパに

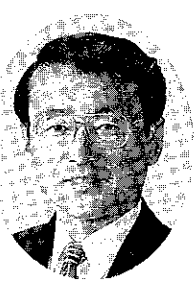
平成9年度
三重校総会案内

とき／平成九年四月二十日（日）
十一時三十分より
ところ／津都ホテル 伊勢の間
会費／五千元
備考／日程等詳細については後日年度幹事を通じて連絡いたします。



自主・自律の津高時代

中川 正 春 (昭和44年卒)



去年の十月二十日に行われた総選挙で、三重県第三区(関・亀山・鈴鹿・桶・四日市南部)から当選させていただくことができました。同窓会皆様には、力強いご支援をいただきましたこと、改めて心から感謝申し上げます。又、選挙の応援を通じて、皆さんのパワーと広い分野での活躍を今更ながらに理解させていただくことができ、津高の同窓であるということが改めての誇りを持つことができました。

私は、昭和四十四年卒業。第二次安保闘争が盛んな時で、東大田講堂の占拠で受験のなくなった年です。私は、その頃から政治が好きで、生徒会長をしながら大学からやってきた民青や全学連やらの先輩と、訳の解らない議論などもやっていた事を思い出します。結果的には、その頃の体験が私の気持ちを突き上げて、アメリカへの留学を決意させ、夢多き青春時代四年間を海外で過ごすことになりました。

同じ代議士の先輩としては、外務大臣を務められた木村俊夫先生がおられます。私が、アメリカ留学を終えて日本に帰ってきた時、当時の三雲村の村長で陳川の大先輩でもある宇野先生の紹介でおめにかかる機会をいただきました。その時、木村先生が、世界を語り私に對してもしつかり励ましてくださったことを懐しく思い出します。折しもその木村先生が亡くなられた昭和五十八年、私は松阪市・飯南郡の選挙区から県議会議員とスリッパしてしまつた。

九月十五日ハワイ最後の朝、太陽の上り切らない早朝をハレクラニまで出た。太平洋の海風が吹き抜けるオープンガーデンでの朝食はリゾート情緒満点で皆を喜ばせました。

自然の景観とゴルフを満喫 感動と談笑が一杯のハワイ5泊7日の旅

東京 31 会



「同級生の青山君の操縦するJALで海外に行きたい」東京31会の同窓会で顔を合わせたときに話題になる「我々も来年は遠征」今年がラストチャンスかなあ」と。長い間の夢の計画が遂に実現、九月十日午後九時青山機長の操縦するJAL076便が私達を乗せ轟音をあげて大空に舞い上がった。

定刻の九時四十分、快晴のホノルル空港に到着、ハワイ島のキラウエア火山へ。黒々とした溶岩原に火口から吹き上がる白い水蒸気、壮大な景観だ。海岸線の椰子の並木の間、この側に広がる漆黒の光景は幻想的で大三次元の神秘を垣間見るようになった。ヒルトン・ハワイアンビレッジで、ハワイ第一夜のディナー。賑やかな談笑と感動のうちに長かった一日を終えた。

ハワイ島二日目、ゴルフ好き男女九人がゴルフ三昧の一日を満喫、観光ツアーに出かけたグループは各地を散策、ショッピングなどを楽しんだ。夕食後、眠るのも惜しまれるほど美しい夜景に誘われ、プールに出かけ、星空の下に広がるロマンティックな雰囲気を満喫しながら、マウナ・ケア(満天の星に手が届く)という意味のハワイ語)ビーチの地名にすっかり納得してしまつた。

三日目、快晴のヒロ空港からホノルル空港に戻り、駆け足で観光。夕刻から黄金でナパック・デイナー・クルージングに出かけた。海上からワイキキ・ビーチのイルミネーションに埋まった見事な夜景を満喫。

ハワイ四日目の午後はワイキキビーチへ、久しぶりの水着での水遊びにすっかり津高時代にタイム

一通の手紙

平生 正 子 (昭和20年入)



東にアメリカへ送って下さいました。その事をすっかり忘れた頃(手紙は船便でした)。見知らぬペンフレンドから五、六通の返事が届いたのです。その中に私宛の一通がありました。その一通が私の人生に素晴らしい彩りを添えてくれたのです。

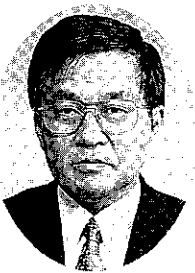
結婚し、アラスカに住んでいます。子供二人と四人暮らしで、こんどは私が彼女の家に泊めて頂きました。家族のそれぞれが個人を大切にしている様子、そして仕事と人生、生きる喜び等、数々の刺激を受けました。主婦業として台所好き人間でひたすら子育てと台所で過ごす私は、彼女からは知り得ない程多くのことを学びました。彼女との交流が五十年も続いたのは私にとつてかけがえのない宝だと思っています。

私は昭和二十年の春、女学校に入学しました。体育の時間はさつまいも畑と化した運動場で、今では全く見かけない肥桶をかついでの農作業の日々でした。上級生は生徒動員で工場へ出かけていました。今の若い人達には想像もできないのではないのでしょうか。そして八月、終戦を迎えました。

その後しばらくしてやっと授業が出来るようになったのですが、その時の若永先生の英語の授業を忘れることが出来ません。教科書で「英文の手紙の書き方」を学んだ時、皆がつかない英文手紙を書きました。クリスマスだった先生はそれを教会の牧師様を通じて

海外永住と情報化社会

岡崎 一 浩 (昭和41年卒)



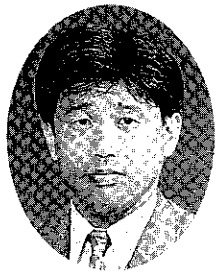
オーストラリアはシドニー市で二十五年前の昭和四十六年から、途中の三年間の東京生活を除き、暮らしている。若い頃から外国に出たい気持ちがあったが、まさか永住しようとは思ってもいなかった。

津で開業していた父の公認会計士事務所をいざ引き継ぐために自分も公認会計士になったのであるが、ついにシドニーで会社顧問や翻訳で居ついてしまった。

オーストラリアは観光地として知られているが、経済的には中進国でアジア諸国に押されているにもかかわらず何故、居つているのかと問われれば、技術革新、オーストラリアも便利になり、日本に帰国する理由が減ってきた事、またオーストラリアのライフスタイルが自分にあっていく事だと思つた。便利になったのはジャンボ機の導入で航空運賃が大幅に下がった事。そのお陰で愛知工業大学の非常勤講師や監査法人のパートナーも可能になった。NHKテレビはパラボランテナがあれば一日中、

「津高と私」

大田 清 則（昭和51年卒）



津高を卒業して二十二年が経ちました。私は、現在、名古屋市内で法律事務所を開業しています。早いもので、弁護士登録して九年、独立して事務所開設したのが三年前。独立してやっていくのが、当時不安もありましたが、幸いにして、現在までなんとか事務所経営を維持しております。最近になって、「弁護士不足」という一面的な認識のもとに、司法試験合格者の数が大幅に増加され、数年

なう多重債務の問題など、さまざまな問題があります。そうした問題に取り組み中では、一般市民の方々の相談を受ける機会が多くなり、どちらかというところ、一般市民の方々に近い視点で、弁護士活動をしてきました。

後には合格者の数が私が受験していた頃の二倍にもなります。つまり、私が弁護士になった頃の二倍のペースで毎年弁護士の数が増えていくことになり、当然、弁護士間の競争が熾烈になっていくことが予想され、私のように弁護士一人や二人でいるところでは、事務所経営を維持していくのにもかなり厳しい時代を迎えようとしています。

私自身は、現在、さまざまな事件に取り組みしていますが、事件の特徴としては、消費者事件の比率がかなり高いということです。消費者事件というのは、先物取引や証券取引などともなうトラウラ宗教の名を借りた詐欺的商法、さらにはサラ金やクレジットにととも

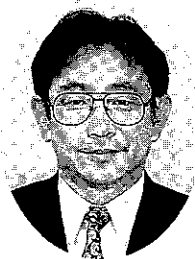
「一面的な認識」と言いましたが、私には必ずしもそうとは言えない面があると思います。一般市民の方々に近づいて、弁護士の数が高くて、弁護士に相談したくても、気軽に相談できる弁護士がいないうと、ということであり、それは、弁護士の数の問題ではなく、弁護士自体の姿勢の問題であると思うのです。市民の方々に近づいて、弁護士がいかにか身近な存在として位置づけられていくかどうかということが重要であると思うのです。

とは言いますが、我が身のことを振り返ってみると、日々の事件処理に追われて、なかなかその問題に正面から取り組むことができないでいる。といった現状なのです。さて、私にとって、津高という存在がどういふものか。実は私が弁護士として仕事をしていくうえで、非常に大きなウエイトを占めています。と言いますのは、私が登録している名古屋弁護士会には津高出身の方が十数名おられます。私の場合も、最初に勤務した法律事務所が津高の大先輩にあたる先生、又その事務所を紹介していたのだのも津高の先輩の先生です。その意味で津高の同窓という強い絆を感じます。

今、自分の津高時代のことを振り返ってみると、楽しい場面ばかりが思い浮かびます。当時はつらいこともあった筈なのに、二〇年経って、津高時代の友人に会うと、そのころと変わらない自分に戻ることができるようで、なんとなく楽しい気分になれるのです。（弁護士）

津高への思い

小倉 昌 行（昭和40年卒）



このたび、戦後生まれ初の津市議会議員に就任しました。これもみなさんの日ごろからの支援のおかげと感謝しています。ありがとうございます。

さて、早いもので卒業して約三〇年が過ぎました。私が一年生のときに焼失し、その後再建された校舎もだんだんと壁に古色が浮かぶようになってきました。そんな変化の激しい中、母校が変わらず

津の発展のために、多くの有為の人材を送りだしていることを、心強く感じています。

そのうえで、期待を申し上げます。在学生に津市でもっといろんな社会的な経験をさせてほしいということ。とすれば、群制度が廃止になるなか、知識を詰め込み受験技術をみがくだけの場に高校がなりがちであることに、危機感を抱いています。

県外に進学する津高の生徒にとって、三年間の高校生活は、津の街で過ごす最後の三年間となりうるものです。津の海のすばらしい風景、活気を失った商店街と繁栄するショッピングストア、そして、必ずしも高齢者や障害者が歩きや

進路室より

進路指導部長 楠井 善 治

数年前、第二次ベビーブーム世代が受験期を迎え、大学入試が少人数で過熱気味になった時期がありました。その頃よく言われたのは、しばらくすると十八歳人口が減少する時期に入り大学入試も比較的に楽になるだろうということでした。いよいよ昨年から数字の上ではその急減期にさしかかってきた訳ですが、個々の生徒を見てみると、と以前と変わらぬ激しい受験競争に直面して、相当な学習量をこなさないと本来の志望校には合格出来ないのが実情のようです。確かに、昨年度の全国的な入試分析結果等を見ても、十八歳人口急増期の時に新設大学が各地にたかさんでできたり、新しい学部学科が増設されたり、臨時に入学定員が増加されたりして急増期に処するべき対策が講じられてきた後に現在の急減期を迎えたので、大学全体の質的な競争倍率はかなり低下しています。しかしなが

すいとはいえない道路など、多くのことを経験として実感してほしいのです。

私の高校生活を振り返ってみれば、学校の中での思い出もたくさんありましたが、街の路地で勉強する事柄も多かったものでした。ボランティアを必修科目とするぐらいの先進的な取り組みが、わが母校ならできるのではないのでしょうか。

抽象的な机上の知識だけでなく、自分の通った高校のある地元の問題や歴史に詳しくなり、社会や政治に対して何か語れるような若者に育ててこそ、国際化のなかで日本という枠組みを乗り越えて、世界で活躍できる人材になれるように考えます。

平成十年には私たちの同期生昭和40年卒と昭和52年卒が同窓パーティーの担当になっています。来年の同窓パーティー（八月二日）ではぜひ皆さんのみなさんとお目にかかりたいと熱望しています。

（津市議会議員）

マレーシア生徒海外研修報告

教頭 小林 秀 則

平成七年度からの群制度解消に伴い、本校は授業時間の確保とゆとりを持った教育を推進するため二期制を導入しました。県立高校では初めての取り組みです。

一方、国際情勢は大きく変動しています。冷戦から協調へ、ボージェスの時代へと急速な勢いで動

いています。国際的にも日本に期待するところが多く、特に新しい時代に対応する若者の育成が急務となっています。本校においてもこの機会に国際化に対応した生徒の育成が提案され、今回の生徒海外研修実施の運びとなりました。

まず、計画に際して訪問国の選定にあたり、色々検討した結果マレーシアへ行くことになりました。選定の理由として、日本から比較的近いこと、平和な多民族国家であり国際化のモデルになること、マハティール首相を中心に急速に経済成長を遂げていること、治安面で安全であることなどの理由から決定しました。参加者は、二年生31名、引率者は三名で、3月23日から28日の五泊六日の日程で第一回の生徒海外研修を実施しました。第一日は名古屋空港からクアラルンプールへ、第二日は、

ホームステイ先のトゥモロー町へ、第三日は、トゥモロー町のバハギア高校と交流会、マラッカに移動、第四日は、ヨーロッパの香り漂う最古の街マラッカを見学、第五日は、日本電装訪問、クアラルンプール市内を見学、夜マレーシア航空と関西国際空港に帰ってきました。この研修において、生徒達はたくさんのお話を聞いたと思うのです。特に、マレーシアでは様々な民族が様々な文化を守り暮らしていることです。宗教においても、イスラム教、ヒンズー教、仏教、キリスト教などがあります。イスラム教寺院を見学するだけでも、女性は腕や足を丈の長い服で覆い、ベールをかぶらなくてはならないのは生徒達も驚いたようです。トゥモロー町では、マレー系の住民の民家、カンボンにホームステイし、イスラム教文化に触れることができました。激しいスコール、きれいな夜の風景、ゴム園、ヤシの木々に囲まれた道路、明るいマレーの人々、すべてが印象に残ることばかりのようでした。このホームステイでのエピソードについて紹介します。この

国は暑い国ですから一日に数回汲み置きの水をかぶって身体をさっぱりさせるマンドレーと呼ばれる習慣があります。それを知り、日本の浴槽と勘違いして、その中に入ってしまった生徒が何人もいました。「この水風呂、えらい深いなあ」と思ったそうです。これを聞いて、腹をかかえて笑いました。また、夜一人でトイレに行くと、何と水が流れてきてびっくりしたそうです。その時、見上げた星空がとっても美しく印象的だと感動していました。

日本電装訪問の時には、社長自ら説明をいただきました。この計画に際しては、本校同窓会のお力添えをいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

この研修を終えて帰国したときの「すごく良かった」という参加生徒たちの言葉を聞き、この国を選んでよかったという実感を味わいました。この研修での体験や経験は、生徒達にとって大きな財産となったのではないのでしょうか。来年度に向け、さらに充実した計画を立てて継続して実施したいと考えています。

現在、高等学校においても各月偶数週の日曜日が休業となり数年後には完全週休二日制に移行しようとしています。ということは、以前過当34単位時間あった授業が30時間になるということです。それに合わせるように、高校において学習指導要領が改訂になり学習内容を学校の実情に合わせて柔軟に設定してカリキュラムを編成することができるようになりました。しかし進学を目指す生徒にとって



ようこそ マレーシアへ WELCOME to MALAYSIA

平成七年度からの群制度解消に伴い、本校は授業時間の確保とゆとりを持った教育を推進するため二期制を導入しました。県立高校では初めての取り組みです。

一方、国際情勢は大きく変動しています。冷戦から協調へ、ボージェスの時代へと急速な勢いで動

いています。国際的にも日本に期待するところが多く、特に新しい時代に対応する若者の育成が急務となっています。本校においてもこの機会に国際化に対応した生徒の育成が提案され、今回の生徒海外研修実施の運びとなりました。

まず、計画に際して訪問国の選定にあたり、色々検討した結果マレーシアへ行くことになりました。選定の理由として、日本から比較的近いこと、平和な多民族国家であり国際化のモデルになること、マハティール首相を中心に急速に経済成長を遂げていること、治安面で安全であることなどの理由から決定しました。参加者は、二年生31名、引率者は三名で、3月23日から28日の五泊六日の日程で第一回の生徒海外研修を実施しました。第一日は名古屋空港からクアラルンプールへ、第二日は、

ホームステイ先のトゥモロー町へ、第三日は、トゥモロー町のバハギア高校と交流会、マラッカに移動、第四日は、ヨーロッパの香り漂う最古の街マラッカを見学、第五日は、日本電装訪問、クアラルンプール市内を見学、夜マレーシア航空と関西国際空港に帰ってきました。この研修において、生徒達はたくさんのお話を聞いたと思うのです。特に、マレーシアでは様々な民族が様々な文化を守り暮らしていることです。宗教においても、イスラム教、ヒンズー教、仏教、キリスト教などがあります。イスラム教寺院を見学するだけでも、女性は腕や足を丈の長い服で覆い、ベールをかぶらなくてはならないのは生徒達も驚いたようです。トゥモロー町では、マレー系の住民の民家、カンボンにホームステイし、イスラム教文化に触れることができました。激しいスコール、きれいな夜の風景、ゴム園、ヤシの木々に囲まれた道路、明るいマレーの人々、すべてが印象に残ることばかりのようでした。このホームステイでのエピソードについて紹介します。この

国は暑い国ですから一日に数回汲み置きの水をかぶって身体をさっぱりさせるマンドレーと呼ばれる習慣があります。それを知り、日本の浴槽と勘違いして、その中に入ってしまった生徒が何人もいました。「この水風呂、えらい深いなあ」と思ったそうです。これを聞いて、腹をかかえて笑いました。また、夜一人でトイレに行くと、何と水が流れてきてびっくりしたそうです。その時、見上げた星空がとっても美しく印象的だと感動していました。

日本電装訪問の時には、社長自ら説明をいただきました。この計画に際しては、本校同窓会のお力添えをいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

（平成8年度大学合格者数）

	国立	公立	私立	短大
H8年度	231	29	978	79
H7年度	169	29	749	51
H6年度	172	25	700	51
H5年度	204	24	851	79

（平成8年度 主要大学合格者数）

	東大	筑大	お茶の水	東大	一橋	金沢	信州	名古屋	名古屋	三重大	京都	大阪府	神大	慶大	上智	中央	東京理	日大	明治	立教	早稲	愛知	愛知	中京	南山	名大	龍谷	近畿	同志	立命	関西	三重大					
	北波	水	京	橋	沢	州	屋	工	重	都	阪	府	島	立	心	智	央	科	本	治	政	教	田	知	院	京	山	城	館	谷	畿	社	館	西	院	学	期
H8年度	2	2	0	2	0	4	8	17	8	84	4	9	5	3	5	12	5	12	17	13	14	5	3	18	38	31	29	28	62	26	34	43	31	82	54	22	23
H7年度	1	5	1	0	0	1	5	15	6	75	7	4	5	2	3	10	4	8	10	10	8	2	16	18	23	25	28	51	17	28	34	28	48	31	19	14	
H6年度	0	5	1	3	1	2	4	10	7	62	4	4	1	2	5	9	4	8	12	10	11	6	1	13	18	14	16	24	37	25	27	43	35	51	36	13	
H5年度	4	4	1	2	2	6	7	8	6	75	14	9	4	6	3	17	5	18	16	19	9	10	2	13	13	22	24	19	57	29	19	60	21	47	44	15	20

お知らせ

平成九年度 同窓パーティー

日時 平成九年八月二日(土)

午後三時より

場所 津センターパレス

(三重会館前)

津都ホテル

担当学年幹事 昭和39年卒(代表 朝井 憲生)

昭和51年卒(代表 大萱 隆久)

各地で同窓会開催

京都同窓会

第三十回の記念すべき津高京都同窓会を、十月二十七日に、洛東岡崎のホテルサンフラワール京都で、同窓会本部から藤岡副会長、別府津高校長、鈴木教諭を来賓に迎えて、開催しました。

の参加が望まれます。総会は毎年十月の最終日曜日に開催することを決定し、開会しました。また、二月の末頃に新春懇親会を開催します。ので奮って参加ください。



九州同窓会

五月十九日に福岡国際ホテルで行われました。先ず鈴木副会長が行われた後、前津市長の岡村本



津高九州同窓会総会

部会長が、同窓会の活動報告をされ、次いで、別府校長が、母校の近況として進路状況とクラブ活動の成果を報告され、後輩が頑張っている様子が分かり心強く感じました。

会計報告・監査報告の後、熊本大学名誉教授の村田氏から「地震大国日本」と題した講演があり、阪神大震災の被害例等を挙げられ詳細に説明されましたが、改めて地震の恐ろしさを教えられました。次いで役員改選が行われ、鈴木

平成九年同窓パーティー (津センターパレス) ゆっくり座って楽しい一刻を!

平成九年度同窓パーティーは昭和39年・51年の卒業生が担当し平成九年八月二日(土)に津センターパレス・都ホテルで開催しました。前回は、38年・50年の卒業生の方々が「メッセウィングみえ」で参加者全員が着席して同窓パーティーを行うという画期的な試みを実施されました。私たちも、この前例に倣いまた立地の良さを鑑みて、再び津の中心部である「津センターパレス」で出席者全員が着席して楽しい一時を過ごしていただけたよう計画しております。

新会長を始め副会長・会計監査・幹事を決定しました。記念撮影を行った後、懇親会に入り和やかな会話が弾んで、最後に恒例の校歌斉唱を行いました。

名古屋同窓会

猛暑も幾分か和らいだ九月七日、ホテルプリシード名古屋にて、本部より岡村会長、西田教頭等のご臨席をいただき開催されました。

総会に先立ち、映画評論家、吉村英夫氏(昭和33年卒)の「二行詩・寅さん・小津安二郎」と題する、実例を挙げながら興味深いお話をうかがいました。また、同氏の津東高校教諭時代に保護者・生徒たちによって書かれた一行詩「母と娘と(父と母と)」の抜粋プリントをいただきました。

総会では、江崎名古屋同窓会会長本部岡村会長の順で挨拶をいただき引き続いて西田教頭から津高の現況についてのお話をうかがいました。その後、懇親会に入り、百余名の会員たちが各テーブルに別れて、

和やかなおしゃべりに花を咲かせました。また陳川、三重校・津高の歴史にまつわるエピソードが披露され、真剣に考え込む人あり爆笑する人ありで時の経つのも忘れられました。最後に全員で校歌を力強く合唱して、来賓の再会を約しつつ閉会しました。

東京同窓会

大任を果された後に、会長として佐野嘉郎さん(昭和17年卒)以下新役員が顔をそろえました。来賓として、本部から岡村会長(昭和15年卒)、津高から別府校長先生他多数の方々に御列席頂き、花を添えて頂きました。

今年度は、会員講演として、会社役員として御活躍された後京都大学経済学部に入學され、博士課程に進まれた岡村利生氏(昭和20年卒)の有意義なお話を伺いました。

来年度は十一月十日(日)と決まり、一回再会を誓いあつて散会しました。



新しいプールが六月に完成

藤村 知弘(昭和32年卒)

津中が現在のところに移転した昭和九年につくられた津高のプールは、太平洋戦争の爆撃・空襲にも耐え六十余年、津中生・津高生が水しぶきをあげてきた。

何回かの修理も限界にきたため平成八年度中に取り壊されることになった。

それを知った水泳部のOB、往年のカップたちが八月十一日(日)に急遽各地から集まり、別府銀孝

特別顧問(昭和12卒)の乾杯スタート。楽しい時間を過ごした。来年の再会を約して閉会した。『豊年や 故郷の名は 津の二字』 天野 清子



報告とお知らせ

◎津高同窓会が平成八年十一月二日鳥羽シーサイドホテルで開かれました。約七十名の参加者があり四十数年昔に戻り楽しく賑やかな一日二日の集いでした。次回は平成九年秋にブラザ洞津で開催の予定です。

◎「津中学六十一期会文集」刊行 混乱の中に中学時代を終え、終戦直前に卒業の津中六十一期生が戦後五十年の区切りとして「津中学六十一期会文集」を刊行した。中学時代の思い出を中心に、仕事や趣味など内容はさまざま。百人がそれぞれの思いを寄せた。

事務局より

封筒の表に「お願い・終身会費払込」と印刷していただいた方、同封の振替用紙で一万円ご送金下さるようお願いいたします。尚、既に納入いただいた方に、この文字が印刷された封筒が届きました場合、まことにお手数ですが、事務局までご連絡ください。

▼次の諸出版物は、それぞれ残部がありますので、ご入り用の方は同封の振替用紙で注文・送金ください。

- ・創立百年記念誌「あゝ母校」
- ・その姉妹編「百年記念録集」
- ・レコード(校歌他)
- ・会報縮刷版
- ・百十五周年記念名簿



土の譜 VI (三重県総合文化センター所蔵)

奥山 文人(昭和40年卒)